

平成29年6月26日 (月曜日)

生涯教育の先駆者 廣池千九郎 ゆかりの人

② 富岡鉄斎

今回は、廣池千九郎(中津市出身の教育者、1866～1938)に影響を与えた人物として、文人画家、儒学者で知られる富岡鉄斎(1836～1924)との交流についてご紹介します。

鉄斎の貴重書に学び
学者としての実力を
着実に伸ばす

廣池千九郎は『中津歴史』の執筆を機に、歴史学によって新生日本に貢献しようという志を立て、京都に旅立



富岡鉄斎

ちます。明治25年8月、廣池26歳の時でした。しかし、京都に来てすぐに後悔します。当時、「学校は同志社と第三高等学校とあるのみにして、更に学者の頼るべき者一人も無し」という状況だったからです。

交流に飢えていた廣池が、知人の紹介で出会ったのが文人画家として知られる富岡鉄斎でした。廣池は京都で『史学普及雑誌』という歴史雑誌を発行していましたが、鉄斎はこの雑誌に漢詩や絵を寄稿してくれました。また廣池にとつてもっともありがたかったのは、鉄斎が蔵書を見せてくれたことでした。

鉄斎は画家として有名ですが、本人が学者と称している通り、もともと儒学や漢学の分野で頭角を現した人物です。

「万巻の書を読み、万里の路を行く」を座右の銘としただけに、その蔵書は質・量とと

二か月余り無事に留守番を果たし、夜半にかけて思う存分たくさんのご本を拝見、勉強ができましたので大喜び、富岡奥様よりは、いまに成功なさる方よとほめられ、信用を得ました」



京都時代の廣池一家 (明治26年)

鉄斎の妻も名を春子といい、妻同士で手紙のやり取りをするなどの交流がありました。

もに世に知られていません。鉄斎はその蔵書を人に見せたがらなかったといわれていました。しかし、若くて誠実な廣池を信頼したように、自分が写生旅行で家を空ける一か月ほどの間、夜間の留守番をするかわりに蔵書の閲覧を許可したのです。廣池はその間、古今の貴重書を読み漁り、学者としての実力を着実につけることができました。

廣池の妻・春子の回顧録に次のような一文があります。

廣池は3年もたたず京都から東京に拠点を移しますが、その後も鉄斎への恩を忘れず、手紙での報告や季節の贈り物を欠かしませんでした。鉄斎も明治41年、廣池が法制史の調査のために中国へ渡航した際、扇面に激励の絵と賛を記して贈っています。

廣池にとつて鉄斎は、険しい学問の道を進む自分を導き、見守ってくれた恩人なのです。(公益財団法人モラロジー研究所廣池千九郎記念館学芸員・矢野篤)